彼日和

小羽 朔夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼日和

【Ｎコード】
Ｎ３００４Ｄ

【作者名】
小羽　朔夜

【あらすじ】
ねぇ、今日も私は貴方を想ってるよ。貴方の光で今日という日が照らされるの。

prologue

「起立。礼っ」

開始の挨拶をしたばかりなのに授業の終わりが待ち遠しいなんて言ったら日直の人に怒られてしまいそうだけど早く休み時間になって欲しいと思う。

２つ斜め前の席。

早く其処で彼の話している姿を見たいと思った。よく通る声は耳に心地好くて、何時まででも聞いていたい。決してお世辞にもカッコいい感じじゃないけれど（多分、榊君や松原君の方が顔は良い筈だ）、でもあの雰囲気は彼だけのものだと思う。やわらかくて、周りもつい微笑みを浮かべてしまうような雰囲気。そして、彼の何がそうさせるのかは分からない、許されるような感覚。それらが皆好きだった。いつも見ていることしか出来ないけど。

「おいっ倉本。聞いてるか～お前、この前の期末、散々だったんだからちゃんと聞いておけよ。」

ぼんやりしてたら注意されてしまった。流石にあれだけやる気なさそうにしてれば先生だって注意したくなるに違いない。こんな姿を彼に見られたらと思うけれど、幸か不幸か彼は今はいない。どちらがより重いか量ってみたら天秤はあっさりマイナスを指した。たとえ恥ずかしくても、やっぱり彼がいる喜びに較べたら些細なことだ。今更クラスを決めたと思われる校長を恨んでみるが仕方ない。

性懲りもなく、またそんなことを考えていたら今度は当てられた。考えてることすら許してくれないらしい、残念。

あと残りは１０分。今までより長く感じられる。早く経って欲しいのに。

あと、8分。あと5分。
2分になった。もどかしくてしょうがない。
50秒、30秒、15秒。5、4、3、2、1。
聞き慣れたチャイムがやっと授業の終わりを告げる。とうとう彼に会えるのだ。

私の席から数えて2つ前、そして1つ左。その場所に彼は休み時間になるとやってくる、隣の教室から。その席の主である親友に会いに来てるのだと公言して憚らない彼はすっかりウチのクラスに馴染んでしまった。たまに先生達も間違えてるらしいのだから、相当だろう。

「ちょっと、麻美。…あらら、また見惚れちゃってるのね。全く、相沢君がいくら光って見えても幻だからね、ソレ。そろそろ戻っておいで〜」
「美奈、もう止めても無駄じゃない？あ〜あ、私も青春したいなぁ。」
美奈、麻衣、私が見てるのは相沢君じゃなくて、マサフミ君（聞いているだけだから、苗字は知らない）だったりするんだけど…なんて思っていても更にからかわれそうでとても言えない。だから曖昧に笑うだけに留めておいた。

確かに相沢君もカッコいい。明るいし、運動神経は良いし、いつもクラスを率先して盛り上げてたりするから人気がある方ではある。でも何処か浮世離れしている感じがあって怖いと思ってしまう。明るい仮面の中の冷たい瞳で裏の裏まで見抜いて来るようで苦手だった。誰かに言ったことは今までないけれど。でも、彼は違う。ちゃんとあたたかい瞳をしてるから。

「トモ～現国の教科書貸して。それがさぁ、朝湖に落としたら湖の女神様が読み耽っちゃっててさ。金の教科書と銀の教科書を貰えないばかりか自分の教科書まで返してくれないんだよ。ひどくない？」
「ん～、４０点。湖に落ちたら普通本はふやけるぜ。しかも金の教科書ってなんだよ。
昨日の鶴の巣作りのがまだ面白かった。ってことでお前には貸せない。」
「ひ、酷い…ちょっとそこの奥さん、聞いて下さいよ。コイツ自分が珍しく持って来てるからってこんな態度とるんですよ。いつもは泣きながら借りに来てばっかなのに。
きっともう私なんてどうでも良くなったんだわ。要らなくなったら捨てるのねっ」
「いや、俺は奥さんじゃないから。マサ、ちょっとそれは流石に気持ち悪いから止めてくれ…」
「トモ、コレどうにかしろよ。お前、まださっきの得点気にしてんのか。
気持ちは分かるけど、マサに当たるの止めてくれよな。ウチのクラスがまた変な目で見られるんだよ。」
「だよな、あの得点も気になるけど、コイツのうっとおしさのが迷惑だ。」
「いや、だってさ。あそこで入るとは思わないじゃんか。なのに…」
「皆にいじめられた～。これは集団いじめだ、学級問題だっ。校長先生に言いつけてやる～
後でトモが泣いて許してくれって言ったって許さないんだからなっ！」
「ああ、もう最後まで言わせろよ。たまには人の話聞けよな。俺だって語りたい時あるのにっ」
「そもそも、アイツ、ウチのクラスじゃないじゃん。なんで誰もツッコまないんだよ…」
「「「あ。」」」

穏やかに時は流れた。彼女と彼を出逢わせないままで。

曇り空から涙、一雫

彼をそうやって見たのは家への帰路だった。帰路と言っても私の家への最短経路ではない。ちょっとした一人だけの小さな抵抗（たまにそういう時がある。一種の逃避かもしれない。）の途中。彼を見掛けた。
彼の周りにはいつも人がいて、その時まで楽しそうに笑っている彼しか私は見たことがなかった。ふざけている彼しか知らなかった。だからこそ、余計にその光景が眼に焼き付いて離れないのだろう。

彼は、今にも泣きそうな顔で笑っていた。小さな公園を前にして。
いかにも子供達が秘密基地を作って遊んでいたような、住宅地に囲まれたちっぽけな居場所。遊具といえば滑り台とブランコしかない。砂場には誰が置き忘れたのか、これまた小さなスコップとバケツが残されていた。
そして、オレンジ色の大きな工事用の囲いがひどく場違いに見えた。耐久問題、少子化、安全性。数ある仕方ない理由できっと、この公園も取り壊されるのだろう。そして、それは高校生である私達は勿論、大人でさえどうしようもないことだ。どうにも出来ないことに違いない。

私達は何時からか、そうしたことをどうしようもないことなのだと、諦めて悟ったフリをして、感情という感情を押し込めて何も考えないようにする。まるで子供の頃、いじめを見て見ぬフリをしてきたように。
弱さを世間のせいにして、自分を正当化して本当のことに封をして。
一体何を守っているのか分からないけれど。
かくいう私もその一人だと自覚はしている。けれど、こういう世の

中だから仕方ない…ほら、こんな風に。でも、彼は違っていた。

悲しそうな瞳で、

“ごめん”と呟いていた。“ありがとう”でも、“仕方ない”でもなく。まるで転校間際の喧嘩した友達にお別れを言うかのような。あたたかくて、でも切ない声で。

その時、持っていた荷物が手から滑り落ちた。ついでに、何だか分からない感情までもが胸の奥に大きな音を立てて投げられ、沈みながら溶け込んでいった。彼がこちらに気付かないことだけが幸いだった。

人はいつもと違う1面を見せられると恋に陥り易いらしい。自分だけ特別な気がするのだとか。

例えば不良が猫を拾ってたり、ぶっきらぼうな彼が赤い顔をしながら心配してくれたり。そんな、少女な展開、私には当て嵌らないとたかをくくりあげていたのに。どうやら認めなければならなくなってしまった。私こと倉木　麻美は志賀　マサフミ君が気になってしまったらしいということを。こういうことだけにはやたらと鋭い、友人二人と姉のことを考えると頭がイタイが、なってしまったものはなってしまったのだ。明日、またクラスで見掛けるのが楽しみになった瞬間だった。

本当の彼は果たしてどちらなのだろうか。両方だとも言えるだろうが、あれから私にはいつもの彼が無理しているように思えてならない。周りが仕方なく付き合っているように見えてはいるものの、一番周囲を許容しているのは実は彼なのではないだろうか。そこまでしている理由は何なのか。

ダメだ、本当に彼に参っているかもしれない。何故ならこんなに気になるのは初めてなのだから。

その翌日。
彼はいつものように友人達に囲まれて談笑しようと試みているようだった。結局、いつも通りが分からなくて曖昧になってしまったようだけど。そのことに気付いているのは私だけのようだった。

“麻美、何見てんの？”
“ん～？…”
“ああ、アレ？いつも通りに騒がしいよね。ホントに志賀君も相沢君も他の人もよく飽きないよね、お姉さん、感心しちゃう。”
“麻衣、花の女子高生がその喋りは良くないんじゃない…？”
“大丈夫っ！私には白馬の王子様が来てくれるもん。”
“麻衣…、それは素でイタイ人だってば。”

彼女達と笑いながら考えていた。勿論目は反らさずに。
彼を慰める手段。仲良くなれる方法。どうしたら良いのか全く分からなかったけれど、でもいつも私がやっていたように諦めるのは嫌だった。結局、何も出来はしなかったけど、彼のおかげで少しだけ自信がついたかもしれない。何が出来るか考えることは興味を持って動く為の一歩だから。

そう思っていたから、その時にも気付いてなかった。後にあんなことになるなんて。私の溜め息はかなり深かった。

風がかき消した聲

彼が笑うと私も嬉しくなる。きっと、笑うことが出来るのは彼が優しいからなのだと漠然と思った。

ただ、無理して作り上げた笑顔は、気付いた人を悲しくさせると彼は知っているのだろうか。

今日はいつも朝から我がクラス顔（表現は恐らく間違ってないハズだ）でいる彼は見当たらなかった。もしかしたら、道でわらしべを拾ってたり、鰐に噛みつかれて皮を剥がれた白兎に捕まってるのかもしれないので、心配ではあるものの様子を見てみることにした。多分彼はそういう人だ。

そう思い、待てど暮らせど…（本当に学校に住み着きたいと思ったことはある。

通学時間くらいなら短縮出来るだろう。ただし、夏限定だが。）彼はまだ来ない。そうしているうちに、予鈴が鳴り響いてしまった。朝、彼に会えないなんて。授業中に眠る訳にも（最近先生に目をつけられつつあるため）いかず、いっそ彼がいないようなら仮病を使って帰ってしまおうかとすら思った。憂鬱だ。

バックミュージック代わりに遠くの方で少々心地好いとは言い難い音が聞こえる。時折何かをひっかくような音も交ざり、さらさらという紙が擦れる音もする。そんな、音のハーモニーを仕方なく耳に入れながら窓の外を眺めた。良い天気。これなら彼も道の途中で雨に濡れた捨て猫に気をとられていることはないだろう。

まぁ、何かしらの興味対象物に捕まってる可能性は大きいが。

「え～、藤原京は天武・持統天皇の時代に造られ、最近の研究では平安京より大きい都であったと言われています。天武天皇と言えば、天智天皇の弟で、大海人皇子ですね。胸に希望のポセイドン、大友皇子と継承権を巡って争い…」

日本史の授業もそろそろＢＧＭにもならなくなってきた。どうせなら、もう少し楽しそうな話に出来ないかと思ってみる。どうせ、私には覚える気がないから意味はないだろうけど。

「…本日の重要語句はここととここです。テストに出すかもしれないので、皆さんしっかり覚えて下さいね。特に高松塚古墳は間違え易いので注意して下さい。

それでは、今日はここまで。日直さん、号令お願いします。」

や、やっと終わった…。ちなみに、内容はほとんど頭に入ってない。

そして、やっぱり今日は帰ろうかな、と思った時だった。

「頼も～」

「「「何をっ！？」」」

彼がにこやかに笑って入ってきた、表面上は。

「マサ。まず、遅刻理由は？」

智仁君が問いかける。

「え～と、兎を追い掛けてラビリンスに迷い込んでたらこんな時間だった？（要は寝坊した）」

「…まぁ、よし。で、頼みは？」

「このクラスのコに用があってね。あ、あのコを借りていきたいんだけど。」

そう言って指されたのは美奈だった。

「橋本？
あの、立ってるコだよな？」
「いや、座ってる方。俺あのコを借りてくね～」
「ん、分かった。良いよな、倉木？」

ウチのクラスには倉木って苗字は一人しかいない。それでもって、私だったりする。で、相沢君が呼んだのは『倉木』だった。

「倉木？」
「ちょっと麻美？」
「麻美ってば。」

つまり。彼が借りてくと言ってたのはウチのクラスの倉木で。それは、美奈のことじゃなく。私…？私？

「わ、私っ！？…ですか？」
明らかに美奈と麻衣はニコニコしてるし、相沢君と志賀君はこっちを見ている。しかも、彼の爆弾発言でクラスのほとんどに更に注目された。
滝君、本読んでないで助けて欲しいですっ！とか、紗耶香ヘルプ～とか数少ない我が道を行く人々に助けを求めてみるけど、来る筈もない。（既に気付いていない訳だし）

そして。クラス（ほとんど）一同に和やかに見送られながら、私は志賀君に拉致られる羽目に陥ったのだった。
さっきまで帰ろうとしてるくらいに憂鬱だったのに。彼が何処かに連れて行こうとしているのを少しだけ嬉しく思いながら。思考の大部分を疑問符に陣取られながら。

何故、彼は私を何処かに連れて行こうとしてるのだろう？何の用があるのだろう？

答える声はなかった。

風がかき消した聲（後書き）

…3話になって、やっと気付きました。
『麻美』と『麻衣』って分かりにくくないですかっ！？

読みはアサミとマイ、なんですけども。フィーリングで文字を決めたのが裏目に出たようです。苗字は最初の音が被らないように考えてたんですが。

後日修正するかと思いますが一段落するまでこのままでお付き合い下さい。

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。作者はこんななので、指摘・感想等頂けたら嬉しく思います。

霧かかる思考の中で

きっと、鋭い（例外多々あり）彼のことだから、昨日のことを追及されると思っていた。
まぁ、最初からバレないようにしてた訳ではないし、あんな現場を予期出来る人がいたら御供え物を捧げてしまうかもしれない。御供えって油揚げだろうか。いや、一応とはいえ人間なのだし、お神酒にすべきだろうか。いやいや、寧ろ子供だったら…そもそも年齢をどう表すのだろう？人間と同じ数え方で良いのだろうか。
…あまりに予想外の出来事で、情報処理が追いつかないばかりか少々逃避し始めてしまう。

「さて…倉木ちゃん。俺が此処に呼んだ理由は分かるよね？」
気付くと体育館倉庫裏だった。（甘酸っぱい想い出だとか、ワイルドな方々と仲良くする以外考えられない）
どちらにしても自分の脳内で繰り広げられた疑問符その他で一杯一杯で何も分かりませんとはとても言えない雰囲気みたいだった。

「分かります、分かりますともっ！えとですね、お、お金は持ってませんっ！ほら、こんなに慎ましく…ってあれ？私のおサイフは？朝、鞄に入れようとして。もしかしてそのままっ！？本日のお昼を如何せん…う～ん劉邦だったかなぁ。（※項羽です）」

「良かった、思った通り普通の人じゃなくて。」
なんかすごくひどいことをさらっと言われた気がした。いやでも、ほら聞き間違いとか。よくあるじゃん。こう…全然別に聞こえるとかね。きっと私のお耳が悪いのよ。そうに違いないわ、麻美っ！
それにしてもお金ないけどどうしよう。

「聞こえてるよね、倉木ちゃん。…えっと、そろそろ戻っておいで？」
いや、やっぱりここはカラダで払うとか？私なんて労働力になるかなぁ。とりあえず、許して貰わないと。

「はい、何でも致しますからそればかりはご勘弁を、お代官様っ！」
な、なんか肩震えていらっしゃいますが。
「す、すいません、やっぱり分かんないです。用件早く済まして早く戻るべきですよ、志賀君震える程寒いみたいだし。」

「お、俺は、別に、寒がり、じゃないよっ！
いやぁ、倉木ちゃん、良いねっ！お、お腹痛い…」
なんでこの方は笑っていらっしゃるんでしょうか？

「えと、よ、用件ね。ちょ、ちょっと待って。ふ、腹筋が。表情筋が。
ふ、普通、そ、そういう勘違いはな、ないって。サイコーすぎっ」
なんだかよく分からないままに、気が済むまで一頻り笑った彼を律儀に待ち続けた私に、彼はやっと涙を拭いながら話し始めたかと思うと爆弾を落としてくれた。

「付き合ってくれない？」
そりゃ、花の女子高生だし？そんな浮わついた話なんか日常的にゴロゴロしてる。内容だって甘酸っぱいのから苦いの、泥沼化したやつまで様々だ。隠してるつもりでもいつの間にかバレてたり、付き合ってもいないのにからかわれるなんてよくある話。
で、でも、そんな甘くて辛くて酸っぱくて苦い話が我が身に降ってくるなんて。どんなドッキリだ。

「…ーー、ねぇ倉木ちゃん、聞いてた？」
はい、聞いてましたけど信じられませんです。
でも、本当に驚かされたのはこのあとだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3004d/

彼日和

2010年10月28日05時17分発行